異空間に漂い 地球思う

京都大学理学研究科付属植物園 ＊ 京都市左京区

標高121㍍の吉田山のふもとに京都大学吉田キャンパスが広がっている。その中の理学部、農学部の建物が立ち並ぶ一角に埋もれるようにして、植物園がある。

一見、普通の中庭にしか見えない。入り口に控えめな看板が掲げられているだけ。だが、そばにニョキッと立っている見慣れない木がヒマラヤに多いチャンチンモドキと聞かされ、やはりここは植物園、と見直した。

「どうぞ奥へ。場所ごとに趣が違いますから」。ワクワクしながら足を進めた。

80年以上の歴史があり、約1・6㌶の敷地内には国内外で集めた様々な植物を、生育環境を考慮しつつ、系統立て

ほっとすぺーす [HOTTO SPACE]

案内は

日高 敏隆（ひだか としたか）さん

総合地球環境学研究所長　1930年東京生まれ。京都大学教授、滋賀県立大学長などを経て現職。日本動物行動学会の初代会長。「チョウはなぜ飛ぶか」「春の数えかた」など著書多数。

て配置している。ここから多くの優れた研究が生まれてきたのだ。

多彩な植物に誘われ、昆虫や小鳥などさまざまな動物が訪れ、定住する。同行した総合地球環境学研究所の今村彰生研究員(32)が木の上を指さし、「あそこにいるのがイカル。ヒヨドリも。エノキの果実をついばんでいますね」と説明してくれた。日高さんも目を細めながら眺めている。

奥に進むと木々がさらに濃い木陰を作っている。「ちょっとした森みたいでしょう。周りが住宅地とは思えない」と日高さん。確かにここにいると、異空間に迷い込んだような錯覚を覚える。

京都大学理学部に赴任したのが1975年。89年から91年まで学部長を務めた。現在の勤務先である総合地球環境学研究所も2001年の設立当初はこの構内に仮住まいしていた。

「頭を休めたいとき、よくここに来る」というが、最近はその時間がなかなかとれない。地球環境を取り巻く問題を解決するため、多分野の専門家が研究を積み重ねる機関のトップとして、全国各地を飛び回っている。

久しぶりに植物園を訪れて日の光を浴び、木の葉が風にそよぐ音を聞く。「もともとがフィールドにいる人間だから、こういうところが合うんですよ」

(友)

「考えごとをするにもいい場所ですね」。木立の中でたたずむ　＊大西健次撮影

＊1923年に開設。単に珍しい植物を集めた栽培園ではなく、生態学的な特色をもった場所にしようと池や岩山、洞穴なども計画的に配置した。入園には申請が必要で、問い合わせは京大生物科学専攻事務室（☎075・753・4070）へ。外部団体の「京大植物園を考える会」が月1回程度、観察会を行っている。